

Daily News ART 木の美を見る

1981年11月6日

Daily News スタッライター
文・トリシアクレーン

美を創るのではなく、素材本来の美しさを発見する。私が選ぶ材料は、木材です。

鉄を調べることを選択した場合、鉄鉱石が何をやるかを知る必要があります。私の役割は発見することです。私は伝統的な彫刻家ではありません。コンセプトに基づいて働き、素材で彼のコンセプトを実現します。彫り始めるまで何が分かるか分からない」角永和夫は北の山の森に囲まれて育った。東京の。しかし、35歳のアーティストは、彼が絵を描き始めるまでは本当に木を高く評価したことがないと言います。「私は当たり前のように木を取りました。絵画でそれらを研究し始めたとき、私は木の材料を直接扱うべきであると決めました、木を見るのではなく、木を見るためのさまざまな方法を探求するので。角永の木彫作品は現在、ハリウッドのSPACEギャラリーに展示されています。彼の作品についての彼の議論は、SPACEでも見られる素晴らしい風変わりな版画家であるアーティスト、

角永和夫の作品は身近なものを再検討することを私たちに強いてます。

寺岡正美によって翻訳されました。しかし、角永の作品は、彼が紙の薄いスライスにカットし、元のログの形状を保持するように再構成したものです。これらのうち最小のものは約1フィートの長さで、最大のもの20フィートを超える芳香族杉です。薄切りにしてから、元のログの形状を維持するように再構成します。

作品は、Galerie Nouvellesでの前回の展覧会KadonagaからDen Haagまで届きました。オランダ。その天気は十分に湿っていて、木はかなり平らでした。しかし、SPACE galleryのオープニングナイトでは、乾いた砂漠の風が外に向かってエディットスペースに吹き込み、これらのスライスされた作品はカールして反り始め、魔法のようにキネティックになりました。

た。角永は見ながらも、スライスが重なっていくのを見て驚いた。これは南カリフォルニアでのアーティストの最初の展覧会です。

石川県で生まれ育った。角永の父親である日本は、森林・製材会社を経営していました。彼が家を出て建築学校に通い、やめて塗装を始めるまで、木の加工はあまりにも馴染み深い光景でした。森を題材に。角永はすぐに、紙と水彩絵の具をあきらめて、木を扱うようにしました。木を失うことなく木を切るために、彼は巨大なミルブレードを使い始めました。木を切り、おがくずの形で必然的に一部を失うのではなく、角永は、クリーンで連続的なラインのために巨大なスライスブレードを使用しました。

角永の作品は、身近なものを再検討し、日本人のやり方、良質な素材の性質を理解することを余儀なくさせています。角永和夫の作品は、12月5日までSPACE、6015 Santa Monica Blvd. ギャラリーの営業時間は、火曜日から土曜日の午前11時から午後5時までです。

